

領域「健康」の学びにおける情報機器を利用した授業実践に関する一考察

A Case Study on Classroom Practice Using ICT Devices in the Area of “Health”

坂口 将太*

Abstract

This study's purpose was to examine the opinions of female junior college students majoring in childcare (1st year students) about the contents of their classes on “Health” by having them create simulated childcare videos using smartphone devices.

In the class, the participants developed a teaching plan, filmed and submitted a simulated childcare video, gave a presentation on the content of the simulated childcare, and watched each group's videos. After completing these activities, the participants were asked to complete a survey using a web-based questionnaire form.

As a result of examining the responses, it was found that many participants answered they had learned something new in the class. In addition, the level of satisfaction with the class was high. However, many respondents pointed out the short preparation time and difficulty of making videos. Many students felt that it was easy to send the videos because they used the transmission function they use in their daily lives.

The open-ended questionnaire showed that the students found the preparation of the teaching plan, the implementation of the mock childcare, shooting the video, and the group activities interesting, but simultaneously found certain difficulties. In addition, as pointed out in the optional questions, many of the respondents mentioned the short preparation period.

By utilizing these discoveries in future class practice, the class can promote more independent and interactive learning by participants.

キーワード：保育内容、5領域、模擬保育、スマートフォン、テキストマイニング

I はじめに

2019年4月1日より新教職課程がスタートし、幼稚園教諭免許状における教職課程も見直しが行われた。教職課程において新たに加わった内容の中には、「アクティブラーニングの視点に立った授業改善」や「ICTを用いた指導法」などが含まれている。これらの内容について保育教諭養成課程研究会は、養成段階において必ずしも完成されるものではないが、現場で働く中で着実に身に付けられるよう養成

校においてその基盤を作る必要があると述べている¹⁾。その新教職課程の編成を検討していく中で教職課程コアカリキュラムが作成され、上述のICTを用いた指導法については「保育内容の指導法」において「情報機器および教材の活用を含む」の記載があり、到達目標として「情報機器及び教材の活用方法を理解し、保育構想に活用することができる」ことが求められている^{2)、3)、4)}。近年、授業において様々な情報機器が活用されるようになってきた。その背景には、インターネットの急速な発展やそれに

* Shota SAKAGUCHI 聖和短期大学 准教授

- 1) 無藤隆代表、保育教諭養成課程研究会編（2020）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づいた提案～』。萌文書林
- 2) 保育教諭養成課程研究会（2017）平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—。
- 3) 文部科学省（2017）教職コアカリキュラム報告書。
- 4) 全国保育士養成協議会（2018）幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について。

伴うIoT化による情報機器の普及が挙げられる。総務省の発表によるとモバイル端末の世帯保有率は9割を越えており、スマートフォンの世帯保有率は8割以上になっていると報告されている⁵⁾。このことから、情報機器端末は非常に身近な物になっていることが伺える。また、スマートフォンの普及に伴って様々なアプリが配信されている。もちろん、教育や学習に関するアプリも多数配信されており、学習者は自身の状況に合わせたアプリを利用して効率的に学習している姿も見られる。そのような状況の中で、保育者養成の「保育内容の指導法」に関連する科目においては、情報機器及び教材の活用法を踏まえた授業を展開していくことが求められる。

加えて、近年では、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での授業や密集、密接しての活動に大きな制限がかかっている。それに対して、情報機器を用いた授業展開は受講者の学びを支援している。実際に、領域「健康」の指導法に関する授業において情報機器及び教材の活用について検討した研究も報告されている⁶⁾。その中では、受講者が授業担当者に対して課題を提出する際に情報機器を活用している様子が伺える。こういった活動に加えて、授業の中で受講者自身が自ら様々な情報機器に親しんで、目的に応じた機器を組み合わせることができるようになる機会を設けることが推奨されている¹⁾。

そこで、本研究では実際の授業での情報機器の活用に焦点を置き、領域「健康」に関する学びにおける情報機器を利用した授業実践に関する知見を得ることを目的とした。

II 方法

1. 調査対象

保育を専攻する女子短期大学生（1年次生）で「保育内容 健康」（保育内容の指導法（情報機器および教材の活用を含む。）に関連する科目）の授業を受講していた116名を対象とした。そのうち、質問紙調査への回答時に欠席していた者を除く101名を調査対象とした（有効回答率87%）。

2. 模擬保育動画について

対象者を3名もしくは4名1組のグループに分け、模擬保育の動画を作成させた。動画の時間は10分程度を上限として、内容は領域「健康」に関わる活動であることを指定した。

動画作成については、3回の授業の中で取り組む形をとった。1回目の授業では動画作成の手順や注意事項に関する説明を行い、残りの時間は指導案作成に充てる形とした。2回目の授業では、指導案の作成および模擬保育動画の撮影の時間に充てた。3回目の授業は、全グループによる動画に関する発表と動画視聴の時間に充てた。指導案の作成および動画の作成については、授業時間外でも取り組んで構わない旨を伝えた。

動画を作成するにあたり、対象者にはグループごとに指導案を作成および提出させ、それに沿って動画を制作するよう指示した。

動画の撮影については、一人一役になるように各自で役割を分担させた。また、子ども役など人員が必要だと思われる場合には、グループ間で相談して協力して問題ない旨を伝えた。撮影機材については、各自のスマートフォンを利用する形とした。その際、後述する提出方法および対象者の扱いやすさの観点から、特定の機種を指定した。

動画の提出については、Bluetooth接続によるファイル送受信機能を用いて、対象者のスマートフォンから著者の研究用タブレット端末に提出する形とした。提出された動画は、3回目の授業において動画を視聴する際に、著者のタブレット端末をプロジェクターに接続する形で流した。

3. 調査方法および調査項目について

3回目の授業が終わった後、今回の模擬保育動画に関する質問紙調査を実施した。調査にあたっては、webアンケートシステムを利用してアンケートフォームを作成した。回答については、アンケートフォームのURLをQRコード化し、それを対象者のスマートフォンで読み取ってもらい回答する形とした。調査を実施する前に、記入内容によって個人が特定されることや成績評価への影響等の不利益を被ることが無いことを伝え、回答への同意を

5) 総務省（2021）令和3年情報通信白書。

6) 中西一弘（2021）保育者養成課程における「領域『健康』の指導法」の授業内容の検討—情報機器及び教材の活用に注目して—。淑徳大学短期大学部研究紀要、63：41-47。

表1 本研究で用いた質問項目および回答形式

質問項目	回答形式	スケール1	スケール4	スケール7
1. この授業（全3回）での学びはありましたか	7件法	全くなかった	どちらともいえない	とてもあった
2. この授業（全3回）に満足度をつけるとしたらどれくらいですか	7件法	大いに不満	どちらともいえない	大いに満足
3. 準備期間（全3回のうち2回分）は適切でしたか	7件法	少ない	ちょうどいい	多い
4. 動画の撮影または作成は難しかったですか	7件法	かなり難しかった	どちらともいえない	全く難しくなかった
5. 教員への動画の提出やグループ内での共有は難しかったですか	7件法	かなり難しかった	どちらともいえない	全く難しくなかった
6. 単元（実施内容）を考えるにあたって、参考にしたものは何ですか（例：図書、YouTube など）	自由記述	/		
7. この授業（全3回）の良かった点、面白かった点があれば教えてください	自由記述			
8. この授業（全3回）で難しいと感じた点があれば教えてください	自由記述			
9. この授業（全3回）の改善点があれば教えてください	自由記述			
10. その他、この授業（全3回）に関する感想があれば教えてください	自由記述			

得た。

質問項目は、表1に示す通りである。設問1～設問5までは7件法による選択形式、設問6以降は自由記述とした。

4. 統計処理について

設問1～設問5について、各選択肢の観測度数に偏りが見られるか検討するために χ^2 適合度検定（期待比率：均等）を実施した。加えて、各選択肢の観測度数が期待度数よりも多いかどうかを検討するために二項検定を実施した。有意水準は全て危険率5%未満とした。

設問6以降の自由記述については、ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いてテキストマイニングを実施し、各設問において出現する単語の頻度およびTF-IDF法による出現単語のスコアについて検討した。

Ⅲ 結果

表2にQ1～Q5までの設問における各選択肢の観測度数を示した。 χ^2 適合度検定の結果、いずれの設問においても有意な観測度数の偏りが認められた（表2）。次に、各設問でどの選択肢が期待度数よりも多いかを検討するため、各選択肢に対して二

項検定を実施した。その結果、Q1およびQ2では、スケール6およびスケール7の観測度数が有意に多いことが認められた。Q3においては、スケール1とスケール4の観測度数が有意に多い結果となった。Q4について、スケール1、スケール3およびスケール4の観測度数が有意に多いことが認められた。Q5では、スケール7の観測度数が有意に多いことが認められた。

表3～6に、Q6からQ10における単語の出現頻度およびスコアを示した。今回、各設問において出現回数の多い単語のうち上位5つを示した。

Q6において、「YouTube」や「図書」、「保育」といった単語の出現回数が多く見られた（表3）。

Q7においては、名詞では「保育」、「グループ」、「動画」、「模擬」、「子ども」といった単語が多く見られた（表4）。動詞では「できる」や「考える」といった単語が多く見られ、形容詞では「良い」や「面白い」といった単語が多く見られた。

Q8においても同様に、名詞では「子ども」、「保育」、「グループ」、「動画」といった単語が多く見られた（表5）。動詞ではQ7で見られた「考える」や「できる」といった単語に加えて、「感じる」といった単語が多く見られた。形容詞については、「難しい」が他の単語よりも非常に多く出現していた。

表2 Q1～Q5における選択肢の観測度数

設問		スケール1	スケール2	スケール3	スケール4	スケール5	スケール6	スケール7	χ^2 値およびp値
Q1	観測度数	1	1	0	8	5	31	55	141.198
	二項検定p値	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	p<0.001	p<0.001	p<0.001
Q2	観測度数	3	1	1	16	11	38	31	92.574
	二項検定p値	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	p<0.001	p<0.001	p<0.001
Q3	観測度数	23	8	19	48	1	1	1	125.01
	二項検定p値	p<0.01	n. s.	n. s.	p<0.001	n. s.	n. s.	n. s.	p<0.001
Q4	観測度数	21	7	23	27	9	3	11	34.772
	二項検定p値	p<0.01	n. s.	p<0.01	p<0.001	n. s.	n. s.	n. s.	p<0.001
Q5	観測度数	5	2	4	19	8	12	51	121.822
	二項検定p値	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	p<0.001	p<0.001

n. s. : no significant

表3 Q6における単語の出現頻度およびスコア

名詞			動詞			形容詞		
単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア
YouTube	39	37.02	考える	5	0.07	分かりやすい	1	0.12
図書	17	51.25	ねらう	2	3.27			
保育	12	25.28	学ぶ	2	0.21			
要領	7	12.56	書く	2	0.22			
教科書	6	3.92	きれる	1	0.03			

表4 Q7における単語の出現頻度およびスコア

名詞			動詞			形容詞		
単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア
保育	49	189.03	できる	44	2.43	良い	32	1.38
グループ	37	29.52	考える	40	4.44	面白い	25	2.36
動画	27	4.59	見る	11	0.09	楽しい	13	0.39
模擬	25	113.13	思う	11	0.07	よい	12	0.3
子ども	23	17.71	出来る	10	0.27	多い	3	0.03

表5 Q8における単語の出現頻度およびスコア

名詞			動詞			形容詞		
単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア
子ども	29	26.62	考える	36	3.61	難しい	70	33.82
動画	26	4.27	感じる	17	1.55	短い	4	0.49
保育	20	54.05	できる	11	0.15	良い	4	0.02
グループ	14	4.95	撮る	7	0.43	分かりやすい	3	0.99
撮影	14	4.03	書く	7	0.25	少ない	3	0.11

表6 Q9における単語の出現頻度およびスコア

名詞			動詞			形容詞		
単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア
動画	24	3.65	思う	33	0.62	欲しい	17	0.63
保育	18	46.35	考える	15	0.64	良い	15	0.31
授業	15	4.9	感じる	11	0.66	短い	8	1.90
模擬	12	42.39	できる	10	0.13	多い	5	0.07
グループ	12	3.72	増やす	6	1.06	ほしい	4	0.05

Q9では、名詞において「動画」、「保育」、「授業」、「グループ」といった単語が多く見られた(表6)。動詞では「思う」、「考える」、「感じる」、「できる」といった単語が多く見られた。形容詞については、「欲しい」や「良い」といった単語が多く見られた。

Q10では、名詞で「保育」、「授業」、「動画」、「模擬」、「グループ」といった単語が多く見られた。動詞では「思う」、「できる」、「考える」、「感じる」といった単語が多く見られた。形容詞に関しては、「良い」、「楽しい」、「難しい」といった単語が多く出現していた。

IV 考察

本研究は、保育を専攻する短期大学生を対象として領域「健康」の学びにおける情報機器を利用した授業実践に関する知見を得ることを目的とした。対象者に、授業の中で5～10分の模擬保育動画をスマートフォンで撮影、Bluetooth機能を利用して提出してもらった。また、各グループに模擬保育の内容等についてプレゼンテーションしてもらったと同時に全員で動画を視聴した。その後、一連の授業内容についてのwebアンケートフォームを利用した質問紙調査を実施した。

1. 選択形式のアンケート結果について

まず、表1の7件法による選択形式の設問について検討していく。Q1の設問は、「この授業(全3回)での学びはありましたか」であった。これについて、 χ^2 適合度検定の結果、回答数の有意な偏りが認められ($\chi^2(6) = 141.198, p < 0.001$)、二項検定の結果からスケール6およびスケール7の回答数が期待度数よりも有意に多いことが認められた(p

< 0.001)。Q1におけるスケール5以上は、設問に対する肯定的な選択肢となっており、多くの対象者が今回の授業内容において学びが得られたことを示唆している。近年、授業においては主体的な学びが重要視されており⁷⁾、授業においてもアクティブラーニングといった受講者が主体となって学びが展開される形式が見られるようになってきている。今回実施した授業内容も対象者にグループで動画を作成してもらった活動を主としておりアクティブラーニング型の授業と言える。アクティブラーニング型授業の学習効果を検討した研究⁸⁾では、授業への理解度や満足度が高いことが報告されている。本研究においても、今回の授業内容によって新たな学びが得られていることから先行研究を支持する結果となっている。

Q2の設問は、「この授業(全3回)に満足度をつけるとしたらどれくらいですか」であった。 χ^2 適合度検定の結果、回答数の有意な偏りが認められた($\chi^2(6) = 92.574, p < 0.001$)。二項検定を実施した結果、Q1と同様にスケール6およびスケール7の回答数が期待度数よりも有意に多いことが認められた($p < 0.001$)。Q2についてもスケール5以上は設問に対する肯定的な回答となっており、対象者の多くは高い満足度を示していることが明らかとなった。こちらも上述の先行研究⁸⁾が述べていることと共通した結果であった。保育者の仕事は、関わる対象が乳幼児であるという特性上、子どもの状況に合わせて様々な活動を様々な形で展開していくことが求められる。そのため、一日一日の保育の自由度が高くなる傾向がある。このことから、保育者養成におけるアクティブラーニング型の授業は保育の特性と親和性が高いことが伺える。今回の授業にお

7) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会(2012) 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ)。
8) 杉山成・辻義人(2014) アクティブラーニングの学習効果に関する検証：グループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較による。小樽商科大学人文研究、127：61-74。

いては各グループで指導案の作成から始まり、模擬保育の実施、その動画の撮影および提出、プレゼンテーションと受講者が主体的に活動を展開する内容が多く盛り込まれていた。その中で、受講者が主体的・対話的に学びを深めていくことができたことにより、Q1およびQ2の回答結果につながったと考えられる。

次に、Q3の設問は、「準備期間（全3回のうち2回分）は適切でしたか」であった。 χ^2 適合度検定の結果から、こちらも回答数の有意な偏りが認められた ($\chi^2(6) = 125.01, p < 0.001$)。二項検定の結果では、スケール1とスケール4の回答数が期待度数よりも有意に多いことが認められた (スケール1 : $p < 0.01$ 、スケール4 : $p < 0.001$)。Q3はスケール3以下が「少ない」、スケール5以上が「多い」という選択肢となっており、準備期間が短いと感じる受講者が多かったことが示唆された。今回、動画作成の説明、指導案の作成、模擬保育の実施、動画撮影および提出、プレゼンテーションという内容を3回分の授業で実施した。この中で多くのグループが指導案の作成に対して、著者の想定よりも時間がかかっている印象であった。その理由として、今回の対象者が短期大学の1年次生であり、カリキュラム編成上、指導案の作成方法を学び出して間もない時期であったことが挙げられる。加えて、模擬保育の内容も領域「健康」のねらいおよび内容に沿ったものであるという条件以外、特に指定しなかったため。そのため、指導案の作成に多くの時間を割く形になったと考えられる。それにより、他の内容に取り掛かるための時間的余裕が少なくなり、準備期間が短いと感じる結果に至ったと考えられる。また、グループでの動画撮影であったことからグループメンバーで時間と場所を決めて撮影する必要があり、それらの調整がうまくまとまらず時間がかかったケースも見られた。これらのことから、今後の授業実践においては、授業回数を増やすことを検討していくとともに、授業内での指導案作成に関する説明内容や指導案の内容についての条件指定などを検討していく必要があると考える。

Q4の設問は、「動画の撮影または作成は難しかったですか」であった。 χ^2 適合度検定を行った結果、こちらも回答数の有意な偏りが認められた ($\chi^2(6) = 34.772, p < 0.001$)。二項検定を実施した結果、スケール1、スケール3およびスケール4の

回答数が期待度数よりも有意に多いことが認められた (スケール1 : $p < 0.01$ 、スケール3 : $p < 0.01$ 、スケール4 : $p < 0.001$)。スケール3以下は「難しい」という選択肢となっており、多くの受講者が動画の撮影や作成が難しかったと感じている結果となった。今回、撮影方法について指定したスマートフォンの使用を推奨すること、活動場面の様子については始まりから終わりまで通して撮影すること以外に条件を指定しなかった。受講者は各グループで作成した指導案の内容に合わせて撮影場所や撮影方法を検討していた。そのような中で、模擬保育がスムーズに展開できなかつたり、撮影した動画の映像や音声などに不備があつたりしたことで何度か撮り直していることが考えられる。それが、今回の回答結果につながっていると考えられる。また、そもそも授業での課題として動画を撮影すること自体が本授業以外で無く、多くの受講者が初めて取り組む課題であった。日常生活で友人などと動画を撮影することはあるが、課題提出物として動画が撮影する経験が無かったことから、多くの受講者が動画の撮影や作成に難しさを感じたと推察される。これについては、撮影条件などを一部指定することで受講者が迷ったり、悩んだりする状況を減少させることができると考えられる。

Q5の設問は、「教員への動画の提出やグループ内での共有は難しかったですか」であった。 χ^2 適合度検定の結果、回答数の有意な偏りが認められ ($\chi^2(6) = 121.822, p < 0.001$)、二項検定では、スケール7の回答数が期待度数よりも有意に多いことが認められた ($p < 0.001$)。Q5はスケール5以上が「難しくない」という選択肢となっており、受講者は教員への動画の提出やグループでの共有についてはスムーズに行うことができていたことが明らかとなった。今回、動画の提出はBluetooth接続によるファイル送受信機能を利用し、対象者のスマートフォンから著者の研究用タブレット端末に提出する形をとった。動画はファイルサイズが大きくなるため、メールで送受信することが難しく、オンラインストレージを利用するケースが見られる。その場合、オンラインストレージへのアップロード方法についての説明などが必要となることに加え、利用時の技術的な支障への対応も求められる。それに対して、このファイル送受信機能は、友人間で動画やファイルを送受信する際に日常的に使われる機能で

あるため、受講者は技術的な支障なく利用することができたと考えられる。また、送信時に相手の端末を指定する際、電話番号やメールアドレス等を必要としないため個人情報の取得を抑制することにもつながる。その一方で、送受信の際は、その場に端末がなければならず、端末同士の距離が離れすぎると接続が不安定、または接続ができなくなるというデメリットもある。今回は授業の課題であったため、授業実施教室に端末を持ち込むことで問題なく提出できていた。さらに言うと、著者がその場でファイルが受信できたかどうか確認することが可能であるため、提出忘れや誤送信を防ぐことができた。これらのことから、情報機器を利用して授業実践を行う際には、専用のシステムや機器を利用することで目的の学びに繋げるだけでなく、受講者が日常生活で汎用的に利用しているシステムや機器を活用することで技術的な支障への対応を減らすことができ、受講者も抵抗なく取り組むことができることが示唆された。

2. 自由記述のアンケート結果について

Q6～Q10は、各設問に対して自由記述形式での回答であった。各設問でテキストマイニングを行い、頻出する単語やそのスコアについて検討した。

Q6は「単元を考えるにあたって、参考にしたものは何ですか」という設問であった。単語を抽出した結果、「YouTube」が出現回数が最も多く、スコアも高かった(表3)。次いで、「図書」、「保育」、「要領」、「教科書」の順で出現回数が多かった。今回、「YouTube」を参考にした受講者が多かった理由としては、模擬保育でどのような内容を実施していくかを視覚的に知る手がかりを得たことが挙げられる。近年、動画配信サイトでは様々なジャンルの動画が配信されるようになっており、保育に関する動画も多く掲載されている。人間は受け取る情報のうち、8割を視覚から得ると言われていることもあり、文章よりも時系列で動きに変化のある動画の方がより多くの情報量を得られることが推察される。そのようなこともあり、受講者の多くが利用したことが考えられる。加えて、受講者が学習においても情報機器を積極的に活用している様子を確認することができた。「保育」、「要領」、「教科書」については、今回の授業において、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」をテキストの一つとし

て指定しており、模擬保育も領域「健康」のねらいおよび内容に沿ったものを実施するという条件を付していたため、参考にしたことが考えられる。領域「健康」には、どのようなことが書かれているのかを確認しながら、指導案および模擬保育の内容を検討していたと推察される。

一方で、動詞の出現回数を見ると、「考える」という単語の出現が見られた。それに関連する回答文を検討してみると、「グループで考えた」という内容がほとんどであった。このことから、数は少ないながらも一から活動内容を考えているグループもいたことが明らかとなった。

現代は情報化が進んでおり、インターネットを經由して検索することでありとあらゆる情報を得られる社会になっている。そのため、授業においても情報機器を活用して情報を取得することや学びを進めていくことは学ぶ側にとって効率的な学習につながると考えられる。それに合わせて、教授する側も情報機器を積極的に活用し、内容を更新していくことが今後より強く求められていくことが予想される。

次に、Q7「この授業(全3回)の良かった点、面白かった点があれば教えて下さい」という設問における単語の出現回数およびスコアを検討した(表4)。その結果、名詞では「保育」、「グループ」、「動画」、「模擬」、「子ども」の順で出現回数が多かった。その中で、「保育」と「模擬」の単語については、スコアが100を越えていた。それぞれの単語に関連する回答文を見てみると、共通して模擬保育を実践できたことに対する肯定的な意見が多く見られた。それに付随して「グループ」で活動したことや「動画」を作成したことを肯定的に捉えた内容が見られた。また、動詞については「できる」や「考える」の出現回数も多く、グループで内容を考えること、実践経験を積むことができたことに関する内容が多く見られていた。形容詞については、「良い(よい)」や「面白い」、「楽しい」といった単語が多く見られた。質問内容が良かった点、面白かった点についてだったこともあり、文末にこれらの表現が多く見られていた。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での授業や活発に身体を動かす内容などに制限がかかっている状況である。その中でも保育者養成において実践を通して学ぶ機会を作っていくためには、こういった情報機器の活用が有効であると考え

る。少人数のグループでの動画撮影であれば、密集や密接を回避しやすい。また、映像記録が残るため、その場や授業後に見返して省察することや撮り直していく中で実践経験の積み重ねにつながる。これらのことから、今回の授業を通して、このような形でも保育者養成において重要な実践の場を確保していくことが可能であることが示された。

Q8の「この授業（全3回）で難しいと感じた点があれば教えてください」における単語の出現回数について、名詞では「子ども」、「動画」、「保育」、「グループ」、「撮影」の順で多く見られた（表5）。それぞれの単語について、回答文を照らし合わせてみると「子ども」では、模擬保育において、子どもが目の前にいることを想定して活動への導入を考えたり、どのような反応をするのかを考えたりすることに難しさを感じていた。「動画」や「撮影」については、動画の撮影に関する内容であった。「保育」においては、模擬保育の内容や流れについて難しさを感じている内容であった。「グループ」については、グループ内での連携や作業に対する難しさに関する内容であった。

それぞれの単語が関連する回答文を読むと、Q7の良かった点や面白かった点と類似した内容に難しさを感じている側面も見られた。つまり、模擬保育を面白いと感じる一方で、その内容を計画し、実際に行う中で思うように進まなかったりしたことやグループで活動する中で意見交換や予定の調整などがうまくいかなかったことなどが発生したと予想される。

また、動詞における出現回数の多かった単語の中でも「考える」といった計画を立てる面での難しさを感じている回答内容であった。加えて、「できる」については、自分たちの計画通りに進まなかったことに難しさを感じている回答内容であった。「撮る」、「書く」といった単語は、動画撮影や指導案の

作成に対して難しさを感じている回答内容であった。今回の対象者は1年次生であったことから、指導案の作成や模擬保育の実践についての経験が少なく、保育の流れを想像することが難しかったのかもしれない。これらのことから、今回の授業に面白さを感じている一方で、同一の内容に対して難しさを感じていたと推察される。今後、指導案や模擬保育に対する説明、先述の動画撮影に対する条件提示などをより具体的に実施していくことも視野に入れておく必要があることが示された。

Q9の「この授業（全3回）の改善点があれば教えてください」に対する回答では、名詞では「動画」、「保育」、「授業」、「模擬」、「グループ」の順で出現回数が多かった。動詞では、「思う」、「考える」、「感じる」、「できる」、「増やす」といった単語が多く出現していた（表6）。形容詞では、「欲しい」、「良い」、「短い」、「多い」、「欲しい」といった単語が多く見られた。いずれの単語においても、共通して準備期間の短さが指摘されていた。これは、Q3の選択形式の質問においても同様の結果であった。先述したように今回は1年次生を対象としたため、指導案の作成、模擬保育の経験が少なかった。加えて、新型コロナウイルス感染症の影響でグループワークやグループディスカッション等の活動に対して様々な制限がかけられた中で授業を受けてきた。これらのことから、今回設定した授業回数では十分に準備することが難しいと感じたと考えられる。回答内容の中では、「1限分多ければよかった」といった内容が多かったことから、次回以降は1限分の時間を準備期間として追加することを検討していく。

Q10は「その他、この授業（全3回）に関する感想があれば教えてください」という設問であった。名詞では、「保育」、「授業」、「動画」、「模擬」、「グループ」といった単語が多く見られた（表7）。動詞では、「思う」、「できる」、「考える」、「感じる」とい

表7 Q10における単語の出現頻度およびスコア

名詞			動詞			形容詞		
単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア	単語	出現回数	スコア
保育	54	215.39	思う	48	1.31	良い	29	1.13
授業	33	21.14	できる	43	2.32	楽しい	15	0.52
動画	25	3.95	考える	40	4.44	いい	13	0.13
模擬	24	107.25	感じる	16	1.38	難しい	11	0.96
グループ	24	13.55	いく	14	0.38	新しい	4	0.13

た単語が多く見られた。形容詞では、「良い」、「楽しい」、「難しい」といった単語が多く見られた。この設問においても、模擬保育やグループでの活動、動画撮影に関連した内容を言及する回答が多く見られた。加えて、他グループの模擬保育を見る時間があったことに対する肯定的な意見が多く見られた。今回の授業の場合、各自のグループで模擬保育動画を作成すると提出で完結してしまうが、授業内で自グループの活動に関するプレゼンテーションおよび動画視聴の機会を設けることでグループ間の情報共有や動画視聴の際の視点の獲得につながったと考えられる。

近年、アクティブラーニング型の授業が多く取り上げられるようになってきたことに加えて、情報機器を利用した授業実施も求められるようになってきた中で、今回、新たな試みとして模擬保育を動画として記録し、各自のスマートフォンで提出してもらう方法を採用した。このような授業形態に対して受講者の多くは大きな抵抗や支障なく模擬保育の動画作製、Bluetooth機能を利用した動画提出が行われていた。加えて、今回の授業における学びに対して、肯定的な意見が非常に多く見られた。今回は一つの授業でのみの実施であったが、今後は他の授業でも情報機器を活用した授業実践を展開していき、そのメリットおよびデメリットを検討していく必要がある。

V まとめ

本研究は、保育を専攻する女子短期大学生（1年次生）を対象に、領域「健康」に関する授業の中で情報機器を用いた模擬保育動画の作成を実施してもらい、その授業内容に対する意見等について検討し授業実践に関する知見を得ることが目的であった。

対象者は、全3回の授業の中で指導案の作成、スマートフォンでの模擬保育動画の撮影および提出、模擬保育の内容に関するプレゼンテーション、各グループの動画の視聴を行った。全てを終えた後、webアンケートフォームによる質問紙調査に回答してもらった。

選択形式の項目について検討した結果、多くの対象者が授業において新たな学びを得られたと感じていたことが明らかとなった。それに付随して、授業への満足度も高いことが明らかとなった。一方で、準備期間の短さや動画作成の難しさを指摘する回答

も多く見られた。動画の提出については、日常生活で用いている機能を利用したことから、容易だったと感じる学生が多く見られた。

自由記述においては、指導案の作成、模擬保育の実施、動画の撮影、グループでの活動といった側面において面白さを感じると同時に難しさや課題を感じていたことが明らかとなった。また、選択形式の設問でも指摘されたように、準備期間の短さについて言及する回答が多く見られた。

これらのことを今後の授業実践において活用していくことで、受講者がより主体的で対話的な学びを進められる授業になると考えられる。

参考文献

- 1) 無藤隆代表, 保育教諭養成課程研究会編 (2020) 『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づいた提案～』, 萌文書林
- 2) 保育教諭養成課程研究会 (2017) 平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—.
- 3) 文部科学省 (2017) 教職コアカリキュラム報告書.
- 4) 全国保育士養成協議会 (2018) 幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について.
- 5) 総務省 (2021) 令和3年情報通信白書.
- 6) 中西一弘 (2021) 保育者養成課程における「領域『健康』の指導法」の授業内容の検討—情報機器及び教材の活用注目して—, 淑徳大学短期大学部研究紀要, 63: 41-47.
- 7) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012) 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ).
- 8) 杉山成・辻義人 (2014) アクティブラーニングの学習効果に関する検証: グループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較による, 小樽商科大学人文研究, 127: 61-74.